論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　教育学　）	氏名	李　勇華
学位授与の要件	学位規則第４条第[1]・２項該当		

論　文　題　目

文学研究と文学教育の交差研究
― 世界観認識の癒着から分離へ ―

論文審査担当者

主　　査　　教授　難波　博孝
審査委員　　教授　山元　隆春
審査委員　　教授　山内　規嗣

〔論文審査の要旨〕

本論文の目的は、従来の文学研究を相対化するために、文学教育をかいくぐり、新しい文学研究と文学教育の地平を探ろうとすることにある。

具体的には次の三つの目的を持っている。

(1)ポストモダン以後のポスト・ポストモダン思想を明らかにすること
(2)これまでのポストモダン思想の受容における問題点を洗い出すこと
(3)具体的な作品の読みを通してポスト・ポストモダン思想に拠る文学教育を示すこと

本研究の方法は以下の通りである。

(1)ポスト・ポストモダン思想を明らかにするために、田中実の〈第三項〉論とバルト III 期を比較する。
(2)ポストモダン思想における受容にある問題点を洗い出すために、具体的にこれまでのバルト思想についての受容を分析する。
(3)ポスト・ポストモダン思想に求められる文学教育のあり方を示すために、おもに中高の文学教材に使われた〈近代小説〉の教材について検討する。具体的な読みにおいて、ポスト・ポストモダン思想に基づいた読みと基づいていない文学研究の読みとを比較する。

論文の構成は以下のとおりである。

序章　本研究の目的・意義・方法
第 1 章　世界観認識の混在から分離へ
―文学研究と文学教育研究の交差研究の徹底化のために―
第 2 章　第三項理論とロラン・バルト III 期
―『恋愛のディスク―ル・断章』を読む―
第 3 章　写真論におけるベンヤミンとバルトの比較
―「カメラ・オプスク―ラ」から「カメラ・ルシダ」へ―
第 4 章　第三項理論と 20 年代のベンヤミン思想「認識批判的序説」を読む

第 5 章　ハンナ・アーレントの公共性とポスト・ポストモダン
―ジャック・デリダとロラン・バルトを視野にして―
第 6 章　ポスト・ポストモダン「思想」に交差している文学研究と文学教育
―ソシュールの世界観認識問題および座談会「文学と教育における公共性の問題―文学教育の根拠」についての検討―
第 7 章　〈近代小説〉におけるエクリチュールと主体
―森鷗外の『舞姫』と『雁』―
第 8 章〈　語り手を超えるもの〉に〈近代小説〉
―魯迅『故郷』―
第 9 章　文学の再生のための、ポストモダンに抵抗する二つの方向
―芥川龍之介の『羅生門』―
第 10 章　〈テクスト論〉の終わり、〈第三項〉理論の始まり
―三島由紀夫の『美神』―
第 11 章　ロラン・バルトの「作者の死」から村上春樹の「神話の再創成」への思想地平
―宮澤賢治の「注文の多い料理店」と夏目漱石『夢十夜』「第六夜」―
第 12 章　〈語り〉において交差している文学研究と文学教育
謝辞
引用参考文献

本研究の意義は以下二点が挙げられる。

1 つ目は、文学研究がどうやって一つの学問として成り立たせるのかということについて、本研究は文学教育研究の立場から具体的な方案を出したことである。特に、混迷するポストモダン以後の思想状況の中で、文学教育と文学研究を橋渡ししながら、ポスト・ポストモダンの文学研究と教育研究を展望できた点である。

2 つ目は、文学教育にとって、「文学」の役割はわれわれの世界観認識を解釈することにあり、その点において、絵画、音楽などの芸術も同じである。「文学」によって、われわれの人生は造り変えられつつあることを示したことである。すなわち、文学研究をすることが、そのまま文学教育を研究することであることを示した点である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和　３年　　２月　１５日